正直な若者

むかしあるところに、母親と息子一人と、貧乏（びーんぼ）な暮らししてあったそうだ。そして、どうやったら楽に暮らしにいいべかっておもって、上のお山のお堂っこあったっけゃぁ、そこさ、毎日神様になんぼ骨折ってもいいし、おっかね目にあってもいんて、金授けてけれぇって、一週間それ、神様さ拝むにあったそうだ。そうしたっけ、そのお堂っこに居で、夢見て、神様が息子さ話かけたど。昔の人、息子どこ兄、兄って言ったもんだものねぇ。「兄、兄、おめなんぼオイの家さ来てしゃ、オイどご

拝んでも、ここに居てだばどうにもならねんて、ある米でおにぎりいっぱい握って、上方さ仕事しに行けって。しぇばほれぇ、いっぱい金授かるとこあらんて」って、こういうふうに教えたわけだ。神様が。夢見てね。今度家さ来て、お婆さんにねぇ、おにぎりいっぺにぎってもらって、おにぎり背負って、上方って言うたって、何里か歩かねばねんだか。山道行ったっけ、行ったっけ、暗くなって西も東もわからねぐなってしまって、山の中に明かりっこ一軒ついてらどこあったっけ、朝間まで泊めてもらおうと思って行ったそうだ。「今晩は」って言ったっけ、「はぁい」ってきて、そこの家にも若者一人しか居ねがったど。東京まで稼ぎに行ぐと思ってきたども、街道もよくわからねぇじゃぁ、暗くなって歩がねっために、今晩一晩庇っこさでもやぁんて、泊めてけらいねがぁ、たっけ、「なんもひやしっこでねっても、家さあがって泊まれ」って。「オレしたども宿賃もなんも持ってねぇ」ってしたら、「宿賃もなんもいらねんてがぁ、あがれ」って。あがったっけ、そこの山の中の小屋っこのその若者まだ、屏風っこ、こう囲炉裏の端さたてて、あだってあったそうだ。その兄あだって、まず話っこ一つ二つ語ったっけ、「あのぉ、オレのババ、今亡ぐなってぇ、能代に棺桶買うに行ぐったって、誰も家見でくれる人いねし、おみゃぁ、あだって、何とかしゃぁ、こにいで、オイのババどご見でけれぇ」って言ったって。どして宿賃も何もいらねっていうし、おっかねぇったたて、「んだが」って、あたってらどぉ、その若者。まず能代さ棺桶買うに行って来るって言うがら。あだっても、あだってもその若者まだ、なかなか帰ってこねわけだ。そしてるうちに、屏風の陰から白髪の髪がっぱりかぶったおばあさんが、「泊まり人いだなぁ」って顔のべたってあった。おっかねして、おっかねして、死ーんたけおっかねして、だまって面あげねんで、あだってらっきゃぁ、今度、来てあったど。そごの家の兄がなぁ。「おっかねがったべぇ」ってきだったけぇ、「おっかねも、なんも、おっかねもなんも、オメのおばあさんでも、おいどしゃしゃぁ、泊まり人いだがって、白髪の髪、がっぱりかぶって二回も三回も面のべた」って言った。「んだべぇ、したどもおれババどご洗って、着物着へで、今こさへねばなんねんて、少し手貸してけれ」って言うわけだ。「オレ、一人でだばどうもなんにゃんて」って。宿あてだって言うために、ババどごも着物着せて、棺桶さ入れて蓋したど。しったっけ今度そこの家の兄まだ、「オメおっかねべども、この棺桶背負っていって山の杉林の中さ置いてきてけれ」ってわけだ。死んだ人白れ着物きせて、蓋したために、背負って杉林の中まで行ったっけ、縄なんぼほどいても背中さ棺桶ビッタリついて、離いねわけだ。こっちゃこすっても、こっちゃこすってもてジッタリ背中さつで、離いねで、「ババ、ババ、オレ、オメの家さ泊まったからったて、見でけれってば見だし、こさ入るに手伝なってけれってば、手伝なったし、なしにオイの背中さつで、離いねがって。オイのしぇながから離いてけれぇ」って。

今度振り回したば、ボダッと落ちたば、みんな小判になってしまったど。ババなんも居ねで。みんな金になったど。棺桶からドワッと金、まがってしまったわけだぁ。そしたっけぇ、家さ帰ってみたっけ、そごの家まだ、あと誰もいねわけだ。その兄も。そこの家から、庭の隅から、じぇんこ入れるんだものを持って行って、じぇんこいっぺ、カマスさひとっつなって、背負って帰って来たど、家さ。今度ババと二人して、幸せに暮らしたって言わった。それでとっぴんぱらりだ。金持ちになって家さ来たっけ、ババと二人、楽に暮らしたと。ようやくまぁ、神様授けてけだったねぇ。その兄まだ、正直だったために。

堀内ツナ（扇田　83歳）

〈解説〉

姥捨て山伝説の変形版である。「通観」にある姥捨て山伝説は、殿様から六十歳を過ぎた老人を山に捨てるように命じられ、息子がいやいや捨てに行くと、老母が途中で木の枝を折っていく、息子の帰り道を教えるためであった。それを聞いて息子は母さんを捨てられず、家に連れ帰って隠す。その後殿様から材木の裏と元の判別法を問われ、老婆の知恵によってそれを解決し、殿様も感心して遂に老人を山に捨てるという命令を撤回したという。この話に比べると、ここにあげた話はずいぶん違うように感じるが、老婆を捨てきれずにためらっていた若者、捨てるという行為を代行した若者への報酬、という話型は似通ったところがある。ただ、自分でできずに他人に代行させたという点と、捨てるという行為をおこなった代わりに長者になるという筋書きは、若干残酷さも感じられるが、聞き手を話に誘い込むという話者の工夫であるかもしれない。